ガザ戦争とハマス

A Critical Essay on the War in Gaza

森　戸　幸　次

はじめに
第Ⅰ章　ガザ戦争の主役 － ハマスの歴史
第Ⅱ章　ガザ戦争の実態
第Ⅲ章　ガザ戦争後のハマス
第Ⅳ章　中東和平「2国家共存」構想の行方

「私たちパレスチナ人の前には2つの選択肢がある。武器を捨ててオスロの仲間がやったように降伏するのか、それとも多大の犠牲を払ってでも私たちの土地と人々に強いられている占領を排除するためジハードを継続するのかの二者択一である」－ハマス創設者アフマド・ヤシン師

はじめに

中東でまた新たな戦争が勃発した。世界は今、この戦争の意味を真剣に問い始めている。今夏、イスラエル人とパレスチナ人の少年が相次いで殺害された事件を引き金に、イスラエル軍とパレスチナのイスラム原理主義組織ハマスとの間で本格的な武力衝突に発展した。主戦場のガザ地区では最近5年間で双方が戦火を交えるのはこれで3度目であり、1948年のイスラエル建国に伴う第1次中東戦争以来の「第7次中東戦争」と名付けられる。

戦争が長期化し、ガザの戦場から連日悲惨な光景に接し、日本をはじめ世界は、「なぜユダヤ人とアラブ人はいまだにパレスチナで戦っているのか」（英誌エコノミスト）と、あらためて問いかける声が広がっている。世界中で最も根が深く解決が21世紀に持ち越された＜中東百年紛争＞の根源にあるパレスチナ問題。歴史的、民族的、宗教的、思想的、文化的な側面を備えたこのパレスチナ紛争の本質を理解することは、解決が難しいのと同様に、これまた私たち日本人にとっても至難の業になっている。この小論では、今夏のガザ戦争を通して中東紛争の主役の座に躍り出たハマスの歴史、思想、戦略、そしてこの背後にある21世紀中東危機の構造変容について考察してみたい。

第Ⅰ章　ガザ戦争の主役 － ハマスの歴史

パレスチナ人の国造りをめざす民族解放の歴史の中でハマスはどのような系譜上に位置付けられる運動なのだろうか。パレスチナ建国闘争史を以下のような3つの時代区分にわけて概観してみる。

〈Ⅰ〉闘争第1期（1930年代から1967年まで）

第1次世界大戦後、英国委任統治下のパレスチナ（1920–48年）で「アラブの蜂起」を指導したアミン・フセイニ、カデル・フセイニ、シェイフ・イッザッディン・カッサーム師ら革命第1世代が活動した時代。とりわけシェイフ・カッサーム師はパレスチを拠点にユダヤ人入植地や英国軍への聖戦（ジハード）を実践した武闘派として知られる。1987年にガザ地区で勃発した第1次インティファーダ（民衆蜂起）を戦うハマスの軍事部門はイッザッディン・カッサーム隊（隊長–ムハンマド・デイフ/44歳）と命名されている。

〈Ⅱ〉闘争第2期（1967年から2004年まで）

1967年の第3次中東戦争でエジプトが統治するガザ地区がヨルダン統治の西岸地区とともにイスラエルに占領され、東エルサレムを含めてパレスチナをイスラエルの占領から解

放する「パレスチナの大義」を訴えるヤセル・アラファトや、第1次インティファーダに対応するためムスリム同胞団のパレスチナ支部（初代アミン・フセイニ）を秘密地下組織「イスラム抵抗運動」（ハマス、アラビア語表記の略称／熱狂の意）に改組して1988年ガザで創設したアフマド・ヤシン師ら革命第2世代が活動した時代。

1993年、アラファトが率いた世俗派のナショナリストを糾合したPLO(パレスチナ解放機構)はイスラエルとの政治交渉を通じてイスラエル占領下にあるヨルダン川西岸とガザ地区に暫定自治を導入する和平取引に応じ（オスロ合意）、パレスチナ民族解放闘争は最大の分水嶺を迎える。

「オスロ」後のパレスチナの国造り運動にとって、中東和平を通してイスラエル国家との「2国家共存」路線を推進するアラファトが主導するPLOの世俗的なナショナリスト勢力の道か、それとも、あくまでも武力闘争を通してパレスチナを解放してここに「イスラム国家」の樹立をめざす「1国家」構想を推進するハマスのイスラム主義勢力の道か、重大な選択の岐路にさしかかった。

〈Ⅲ〉闘争第3期（2004年から現在まで）

2004年11月のアラファトの死後、パレスチナ解放運動が「アラファト後」の革命第3世代に受け継がれた時代。2005年5月、イスラエルが西岸・ガザ分離構想を実行して一方的にガザ地区から撤退し、ガザ地区を拠点にイスラム主義勢力が影響力を伸張させた。アラファトを後継したマフムード・アッバス率いるファタハは2006年1月の暫定自治評議会選挙でハマスに大敗し、世俗的なナショナリスト勢力が退潮した。両派の主導権争いは2006年12月、双方に100人以上の犠牲者を出す内部抗争に発展、この結果、1994年に導入されたパレスチナ暫定自治区は、解放されたガザ地区をハマスが、占領下にある西岸地区ファタハがそれぞれ自治区を分断して統治する分裂化の道を突き進んでいる。

ガザ反占領・抵抗運動の最前線基地

このようにパレスチナ民族運動の解放闘争史を概観すると、ハマスは、パレスチナの国造りのためには、ファタハが主導する政治解決の道ではなく、武力闘争を通してパレスチナを解放し、このためにはガザ地区をイスラエルに対する反占領・抵抗運動の最前線基地と位置付け、ガザを拠点に西岸地区の占領を終結させることに目標を定めていることが明らかとなる。このための占領終結・解放戦略とはどのようなものなのだろうか。

ハマスの目標、戦略、対外関係などを定めた「聖約」（1988年）によると、「パレスチナの領土はすべてのイスラム教徒に付与されたワクフ（寄進財）（第11条）であるとして、「パレスチナの土地を一部であれ放棄することは宗教理念に対する裏切り行為であり、平和解決なるものもハマスの原則に相容れない（第13条）、したがって「敵が占領しているイスラムの領土を解放するため、ジハード（聖戦）がイスラム教徒の義務である（第15条）と，「2国家共存」をめざすPLOのナショナルアジェンダを真っ向から否定し、パレスチナ全土にイスラム国家を樹立してイスラム法（シャリーア）に基づいて統治し、この国家の枠内でパレスチナ人とユダヤ人が共存する「1国家」構想を提唱する。

ハマスは、1988年の創設当時、ヤシン師ら創設メンバー7人で最高指導部「諮問評議会」を構成、ヤシン師が最高指導者に就任、サラハ・シェハダがジハード戦略を担う実働部隊として秘密の地下組織である軍事部門イッザッディン・カッサーム隊を創設した。ヤシン師は2004年3月にイスラエル軍に暗殺され、後継のアブドルアジズ・ランテシも同年4月に暗殺、その後、政治部門トップのハレド・マシュアルが最高指導者に就任した。シェハダは2002年に暗殺され、ナンバーツーのデイフが後を継いだ。

ハマスの軍事部門カッサーム隊は、2000年秋に勃発した第2次インティファーダで神風特攻型の自爆テロ戦術を採用、エルサレムやテルアビブなどの各地でバスやレストランを狙って次々に自爆攻撃を繰り返し、イスラエ

ル市民を恐怖に陥れた。

第Ⅱ章　ガザ戦争の実態

トンネル戦争

ガザを戦場にした2006年夏の第6次中東戦争（第2次レバノン戦争）、2008年12月−09年1月のガザ戦争、そして今回のガザ戦争を見ると、ハマスのジハード戦略が浮かび上がってくる。

2006年の戦争では、まずハマスが6月25日にガザから地下トンネルを使って越境してイスラエル兵を拉致（2011年に解放）、イスラエル軍がガザに地上侵攻すると、7月12日、レバノン南部を支配するイスラム原理主義のシーア派組織ヘズボラがイスラエル北部に越境砲撃を開始、同時に地下トンネルを使って北部イスラエルに侵攻して国境警備のパトロール部隊を襲撃、5人を殺害して2人を拉致した。これを引き金にイスラエル軍が南レバノンに侵攻して1982年夏以来の34日間に及んだ第2次レバノン戦争が勃発した。筆者は2011年2月、ヘズボラが実効支配するレバノン南部を訪れ、網の目のように張り巡らされた地下トンネルを見て回ったが、後ろ盾のイランからの支援を受けて軍備増強を着々と進めている様子を実感した。

また、2009年のガザ戦争ではイスラエル軍がガザに侵攻、地上戦で圧倒し、パレスチナ側に1400人の犠牲者が出たがイスラエル側は戦死者10人にとどまった（このうち6人は味方による誤射）。

7月17日、イスラエル軍がガザ地上侵攻に踏み切る引き金になったのが、ハマスの地下トンネルを使ったカミカゼ攻撃だった。
同日未明、ガザ境界から1．6キロ離れたイスラエル南部にあるユダヤ人の共同農場（キブツ）スファにハマスの武装兵13人が地下トンネルから出没してイスラエル領内に侵入、これを発見したイスラエル軍が空爆を加えて撃退した。

7月20日午前1時（日本時間午前7時）、イスラエル軍がガザ市東部にあるハマスの軍事拠点シヤヤジャイーヤ地区に侵攻、市街戦に突入した。イスラエル兵7人を乗せた兵員輸送車が待ち伏せ攻撃を受け、対戦砲で大破、6人が戦死、1人が行方不明になった。翌21未明、シュジャイーヤ地区でイスラエル軍特殊部隊を対戦車砲で襲撃、兵士2人を殺害、9人を負傷させた。

7月28日午前6時、ハマスの武装兵が地下トンネルを使ってガザ南部の境界線に近いナハルオズ（キブツ）に出没、監視塔を襲撃してイスラエル兵5人を殺害、トンネルを使って逃亡した。

8月1日午前8時（日本時間午後2時）、地上侵攻後初めての人道的な一時停戦が発効、午前9時30分、ガザ南部ラファでハマスの武装兵がイスラエル領内に通じる地下トンネルから出没、トンネル壊滅の準備をしていたイスラエル兵と遭遇、ハマス武装兵が自分の腰のベルトに巻き付けていた爆発物を爆破させ、イスラエル兵2人が戦死、1人が行方不明となった。仲間を救出するためイスラエル軍部隊がトンネルを通って追跡し、モスク内の出口に到達したが、無人だった。停戦は数時間で崩壊した。

8月5日午前8時（日本時間午後2時）、地上侵攻後2度目の人道的な一時停戦（72時間）が発効、イスラエル軍はガザからイスラエル領内に通じる地下トンネル32カ所を破壊したと発表してガザから地上部隊を全面撤退した。同時に、ガザ戦争の引き金となった6月12日のユダヤ少年3人誘拐・殺害事件のパレスチナ人容疑者逮捕を発表した（逮捕日は7月11日）。イスラエル裁判所の文書によると、ヘブロン在住のホサーム・カワスメ（40歳）がガザのハマス指導部から資金を得て武器を購入、実行犯2人に指示した、と認めたとされる。72時間停戦の期限が切れ、双方攻撃を再開。

8月11日午前零時（日本時間午前6時）、再び一時停戦（72時間）が発効。8月14日午前零時（日本時間午前6時）、5日間停戦が発効。8月18日に24時間停戦で合意したが、翌19日、停戦協議が決裂し、双方が戦闘を再開した。

8月19日、イスラエル軍がガザ市にある民家を空爆、ムハッマド・デイフの家族を殺害、デイフの安否は不明。8月21日、イスラエル

軍が南部ラファを空爆、カッサ−ム隊の創設メンバ−3人を殺害。

8月26日午後7時（日本時間27日午前1時）、無期限の長期休戦が発効。7月8日の開戦から50日目。

今回のガザ戦争ではイスラエル兵65人が戦闘で命を落としたが、これは主にハマスの自爆攻撃によるものだ。イスラエル側は7月8日以降、5262カ所を空爆、これに対し、ハマス側はロケット弾4562発を発射、このうち3641発がイスラエル領内に着弾したが、うち735発がイスラエルの防空システム「アイアンド−ム」で迎撃された。

世界保健機構（WHO）によると、ガザ戦争による犠牲者は、人口180万人のうちパレスチナ人2100人以上、うち大半が民間人で子供およそ500人、負傷者1万1000人、避難民約60万人、家屋破壊1万7000軒、イスラエル側民間人6人（ユダヤ人、アラブ人、タイ人）を含む71人。

ハマスの2段階戦略

ハマス側は、ヘズボラとイスラエル軍が34日間戦火を交えた第2次レバノン戦争（第6次中東戦争）よりも大きな戦果を上げているため、強気の構えを崩していない。最高指導者ハレド・マシュアルは,イスラエル側との停戦に応じる条件として、（1）イスラエルによるガザ封鎖の解除、（2）パレスチナ占領解放一　から成る2段階戦略を掲げている。「人間の生命維持は条件などではなく、パレスチナに暮らすわれわれ人民の権利であり、このためには港や空港が必要だ。ガザ封鎖は集団的懲罰なので、この解除を要求する。現在の流血を終わらせるためには、ガザ問題の根源である占領の問題に目を向けなければならない。ネタニヤフはわれわれパレスチナ人の希望と夢をすべて打ち砕いた」（米CBSテレビとのインタビュ−、7月28日）。ガザ戦争の指揮をとる「カッサーム隊」のムハマッド・デイフは「ハマスは武装解除を拒否する。西岸を占領から解放し、ユダヤ人国家を地上から抹殺するまで戦う。ジハ−ドと反占領抵抗がなければ、2005年にイスラエルからガザ撤退を勝ち取れなかった。明日のパレスチナはイスラエルにとって地獄になるだろう」（ビデオによる覆面インタビュー、2005年8月）。

ムハッマド・デイフは1970年、ガザ中部のハンユニス難民キャンプで生まれ、1987年に始まった第一次インティ−ファ−ダに参加、何度もイスラエルに逮捕・投獄を繰り返し、1992年以後、地下に潜伏した。1990年代以降は、イスラエル各地で続いたハマスによる自爆作戦を指揮し、イスラエルが追跡するNO1の「テロリスト」になった。2002年6月、サラハ・シェハダがイスラエルの空爆で暗殺されたあと、カッサ−ム隊の指揮をとり、2007年7月の空爆で負傷したが、幾度も暗殺未遂をくぐり抜けて来た。

ハマスは、「レバノンのヒズボラのようにガザ地区を軍事要塞化した」（イスラエル国防省）。ガザ地区は2007年9月、イスラエルから「敵対地域」と宣言され、経済封鎖が強化されたが、07年7月以降、エジプトからの武器密輸ルートを確保するため、地下トンネルを掘り、武器の備蓄を続け、「イラン製過チューシャロケット弾、対戦車ロケット砲（RPG）、AK自動ライフル、爆発物などが地下トンネルを使って40トンがガザに搬入された」（ニュ−ヨークタイムズ2007年9月19日付）という（地下トンネルの地図参照）。

ハマスは、カッサ−ム隊を中核に1万5千ないし2万の兵力がガザ防衛のために地下壕を使って侵攻イスラエル軍と戦う体勢を準備、長期に及ぶ消耗戦に持ち込んでガザ封鎖の解除や検問所の再開などを受け入れる停戦を勝ち取ることを、政治目標に掲げている。これに対し、イスラエル側は、このようにガザを軍事要塞化したハマスの非武装化を達成できないと、地下トンネルの越境攻撃、ロケット弾の越境攻撃を終わらせてイスラエル南部の安全を確保できず、2006年夏にヒズボラが、軍事力を温存したまま停戦した第2次レバノン戦争の二の舞になりかねないだろう。これは、イスラエルにとって、今回のガザ戦争以前への現状維持に他ならず、双方による新たな「消耗戦」が延々と続くことになる。

第Ⅲ章　ガザ戦争後のハマス

しかしながら、2段階戦略を発動したハマス側は、ガザ戦争が長期・消耗戦化するにつれて、第1段階のイスラエルによるガザ封鎖の解除から、国際社会の世論の動向に訴える、第2段階のパレスチナ（西岸）占領解放へと、力の比重を軍事から政治決着へシフトする機会を狙っていると思われる。8月23日、政治局のアブ・マズルークは「イスラエルは、力と抵抗の言葉のみを理解する。ハマスはもはやこれまでの暫定停戦には固執せず、パレスチナ人がエルサレムと占領地（西岸）を解放する闘争を継続する＜抵抗＞に焦点を定めた『統一草案』の起草に動いている。ガザ戦争に軍事解決の道はなく、政治解決を達成しなければならない」（アルジャジーラとのインタビュー）。パレスチナ自治政府のアッバス議長も8月23日、仲介役のシシ・エジプト大統領と会談、スラエルとの長期的な和平合意をめざす考えを表明。国連を通して東エルサレムを首都とするパレスチナ国家を、1967年の第3次中東戦争以前の西岸・ガザに樹立するため、イスラエル側に占領の終結期限を設定するよう求める内容の安保理決議案の作成に向けてエジプト，サウジアラビアなどアラブ各国と協議している。この決議案が安保理で拒否されたら、国際刑事裁判所（ICC）に提訴する構えだ。

ハマスが8月26日、ガザ封鎖の緩和などエジプトの2段階仲介案を受け入れ、イスラエルに力による軍事対決の道を迫る第1段階戦略から、ガザの統治と長期的な政治決着に道を開くための第2段階戦略への転換に舵を切った、と考えられる。「われわれは、過去数年間にわたってイスラエルによるパレスチナ占領地を解放するため準備を進めて来た。今回の戦争は、単にガザの境界線にとどまらず、エルサレムとパレスチナの全面解放が目標だった」（ハニヤ元首相）。「われわれは、イスラエル軍の不敗の神話を打ち砕き、差し迫ったパレスチナ側の要求の一部を獲得した。今回の戦いを通して聖地エルサレムとパレスチナ占領地の解放に近づいた」（ハマスのサーミ首席スポークスマン）。「われわれは、もはやイスラエルとの間でこれからどうなるのか分からない和平交渉を2度と行わない。われわれは、国連に対し、1967年の第3次中東戦争以前の境界線に基づくパレスチナ国家の樹立をめざす詳細な計画を提出する」（アッバス・パレスチナ自治政府議長）。

今回のガザ戦争の犠牲者を単純に比較すると、パレスチナ側約2100人に対してイスラエル側70人と、ハマス側は過去の中東戦争でアラブ諸国が一度も達成できなかった戦果を獲得したことになり、「パレスチナ人の抵抗がもたらした勝利」（同スポークスマン）と位置付けている。双方はエジプトの調停案を通して即時停戦とガザ検問所の再開と人道援助・復興計画、ガザ沖合漁場の11キロ拡大を受け入れたが、今後の間接交渉を通して（1）ガザの港と空港の建設問題、（2）パレスチナ人の釈放問題、（3）イスラエル兵の遺体返還問題―が焦点になる。

第Ⅳ章　中東和平「2国家共存」構想の行方

この中東和平を通して「2国家共存」構想を追求する米オバマ政権は2013年7月、9ケ月以内の最終合意を目指した和平交渉の再開にこぎ着けたものの、将来パレスチナ国家の領土となる西岸地区でのユダヤ人入植活動の凍結などをめぐり行き詰まり、イスラエル右派のネタニヤフ政権との間で政治交渉を通じた政治解決の道は、2014年4月に期限切れを迎えて完全に閉ざされてしまった。仲介役のケリー国務長官は「和平交渉は崩壊の危機にあり、米国が費やす事ができる時間と努力には限度がある」と断言、中東和平プロセスからの後退を表明、中東百年紛争は長い冷却局面に入った。

だがしかし、冒頭で引用した英誌「エコノミスト」が、3年前のガザ戦争の時、「The hundred years`war ― why Arabs and Jews still fjght in Palestine」と問いかけたように、世界で最も問題の根源が深く、解決が至難なパレスチナ問題の解決に国際社会は向き合わざるを得ないだろう。今回再噴火したガザ戦争がいかなる決着の道を辿るにせよ、「パレスチナの民衆に今残されているものは、過去にも将

来にも決して消え去ることのないパレスチナ国家樹立への夢である」（モハメド・H・ヘイカル）という根源的な真理は、今後も消え去ることはないに違いない。

（了）

主要参考文献

1）森戸幸次「中東の戦争と平和の条件」、吉田康彦編『21世紀の平和学』、明石書店、2005年。
2）森戸幸次『中東百年紛争–パレスチナと宗教ナショナリズム』、平凡社、2001年。
3）森戸幸次『中東和平構想の現実–パレスチナに2国家共存は可能か』、平凡社、2012年。
4）森戸幸次『パレスチナ問題を解く–中東和平の構想』、筑摩書房、1996年。
5）森戸幸次「アラブ民主革命–中東和平　重大な岐路に」、2011年8月30日付読売新聞朝刊、「論点」所載。
6）Al-Tahariir（アラビア語紙、カイロ）、December 21, 2013. December 28, 2013. Janiary 4, 2014.
7）Muhammad Ali Khair, *Al tariiq ila Qasr al Uruuba*（アラビア語、カイロ）、Sefsafa Publishing House, Cairo, 2011.
8）Michael Hudson, *ARAB POLITICS*, Yale University Press, New Haven and London, 1977.
9）David E.Long, Bemard Reich, and Mark Gasiorowski, *The Govemment and Politics of the MIDDLE EAST and NORTH AFRICA*, sixth edition, West view Press, 2011.
10）Rabab E L-Mahdi and Philip Marfleet, EGYPT, *Moment of Change*, The American University in Cairo Press, Cairo, 2009.
11）Asef Bayat, LIFE AS POLITICS, Stanford University Press, California, 2010.